



せつきよくし こうけんせつがいしゃ
積極思考建設会社の
クリスマス

「クリスマス・パフォーマンスの進み具合はどうだい？」 家に帰って来たトリストランに、ジェイクおじいちゃんがたずねました。

「ホワイト先生が、新しいクリスマス・ソングをおし教えてくれているんだ。それで、ソロの部分はほくにうた歌わせてくれるって。」と、トリストランが言いました。

「そりゃすごいね。」

「うん。ぼくが一番上手だからね。だれも、ぼくみたいに上手に歌える子はいないんだ。」と、トリストランはじまんしました。

「そうなのかい？」 ジェイクおじいちゃんが、まゆをひそめました。

「もちろん そうだよ。じゃあ、聞いてね。」

そう言うと、トリストランは、ホワイト先生がおし教えてくれた歌を歌ってみせました。

「確かに上手だね。素晴らしい歌声だよ。だけど、神様が下さった才能をじまんし始める時にはいつも、気を付けなくちゃいけない。お前がじまんすると、周りの子どもたちはお前ほどうまくないと思って、気持ちが悪くなることもあるからだ。」

「だけど、本当にぼくが他の子たちよりも上手だったら？」



「それでも、他の子どもたちをはげますほうがいい。
そうすれば、みんなもベストをつくしたいっていう気持ちに
なれるからね。みんなが同じ才能を持っているわけじゃない。
だけど、だれにでも、何らかの特別な才能があるものだ。
ちょうど、積極思考建設会社のお話のようにね。」



積極思考建設会社は、クリスマス映画のさつえいに使う
セットを作る仕事をするようになりました。みんな、
こうふんしています。重機車両はみんな、最高の状態で
働けるように整備され、中には塗装し直してもらった
車両もありました。

監督さんがみんなに言いました。「君たちが素晴らしい
仕事をしてくれることを、期待しているよ。君たちは、
素晴らしいチームだ。それぞれ、ベストをつくしてほしい。
楽しく働いてくれたまえ！」

「映画のセットを作る仕事をもらうなんて、考えたことも
なかったよ。こんなこと、今までにしたこともないしね。」と、
ミニショベルが油圧ショベルのダググスに話していました。

「ぼくだってそうだよ。だけど、ぼくたちはチームで
協力して働くことを知っている。ぼくたちは、素晴らしい
建設チームだと思うよ。だからこそ、この仕事をもらったんじゃ
ないかな。だから、心配ないよ。今までしてきたように働けば
いいんだ。きっと、いい仕事ができるさ。」





「ありがとう、ダグス。ぼくに仕事を教えてくれたのも、
君だしね。君から教わるのは楽しいよ。」と、ミニショベル。

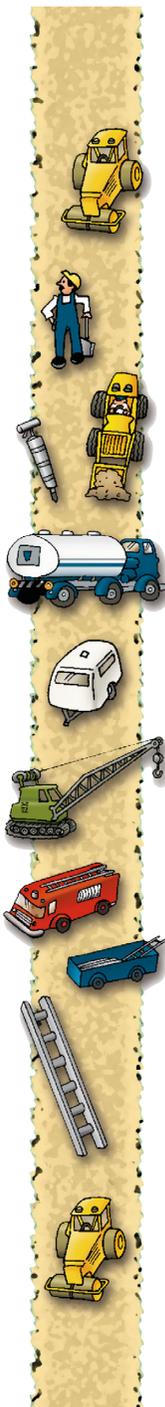
「どういたしまして。」

最初の数日間、建設工事は順調に進んでいました。ところが、
しばらくすると、重機車両の何台かが問題をかかえ始めました。

ある日の昼休みのこと。クレーン車のクランクが神経質に
なっていました。「もう、ローリーとはいっしょに働けないよ。
やたらといばりくさって、うるさいんだ。塗装し直してもらった
せいだね。何かをのせようとするたびに、塗装がよごれるって、
大さわぎなんだ。1人で働いたほうがいい仕事ができそうな
くらいだよ。」と、クランクがブルドーザーに話していました。

「その気持ち、わかるよ。ダグスなんて、建設について
自分がどれだけ知っているか、えんえんとしゃべり
続けるんだぜ！ おれよりも、自分のほうがずっと役に
立ってるって思っているのさ。おれは、他の仕事をさがしに
行くよ。やつのそばにはいたくないからな。」と、
ドウザーも言いました。





現場の他の場所では、ダグスがロードマーカと
ロードローラーに、ドウザーがどれだけなまけているかを
話していました。「それだけじゃない。コンクリート兄弟だって
そうさ。どうして彼らがこの建設チームにいるのか、
わからないよ。」

「おい、君たちを待ってるんだぞ。」 ダンプカーのディーが
ふきげんそうに言いました。「ホリデーか何かだと思っ
ているのかい？ しなくちゃいけない仕事があるんだ。
さっさと始めようぜ！」

そう言うと、ディーはガタゴトと音を立てながら、先
に行ってしまいました。

「みずばらしいディーが、そのままだぞ。やつは、ぼくたち
みたいに整備してもらえなかったみたいじゃないか。
ふきげんなのも、無理はないな！」と、ダグスが言いました。

「だけど、ぼくたちももう、仕事にもどらないと。
そうでないと、ディーがもっとふきげんになるよ。」と、
ロードローラーが言いました。

「別に、やつが必要だとは思わないんだがね。ぼくたち
だけでも仕事ができるじゃないか。おこりたかったら、
おこらせときゃいいさ。」と、ダグスが言いました。

その日の午後、監督さんが工事の進み具合を見るために
やって来ました。（何かがうまくいっていないぞ。）と、
監督さんは思いました。





チームにした車両の大部分が、いっしょに働いていません。
非常に不満そうな車両もいます。言い争いがたえず、仕事もちゃんと進んでいません。

「こりゃ、まずいな。このままじゃあ、時間までに工事が終わらない。何か手立てを考えないと！」と監督さんは思いました。

「こんにちは、監督さん。」 陽気な声がしました。
ミニショベルです。

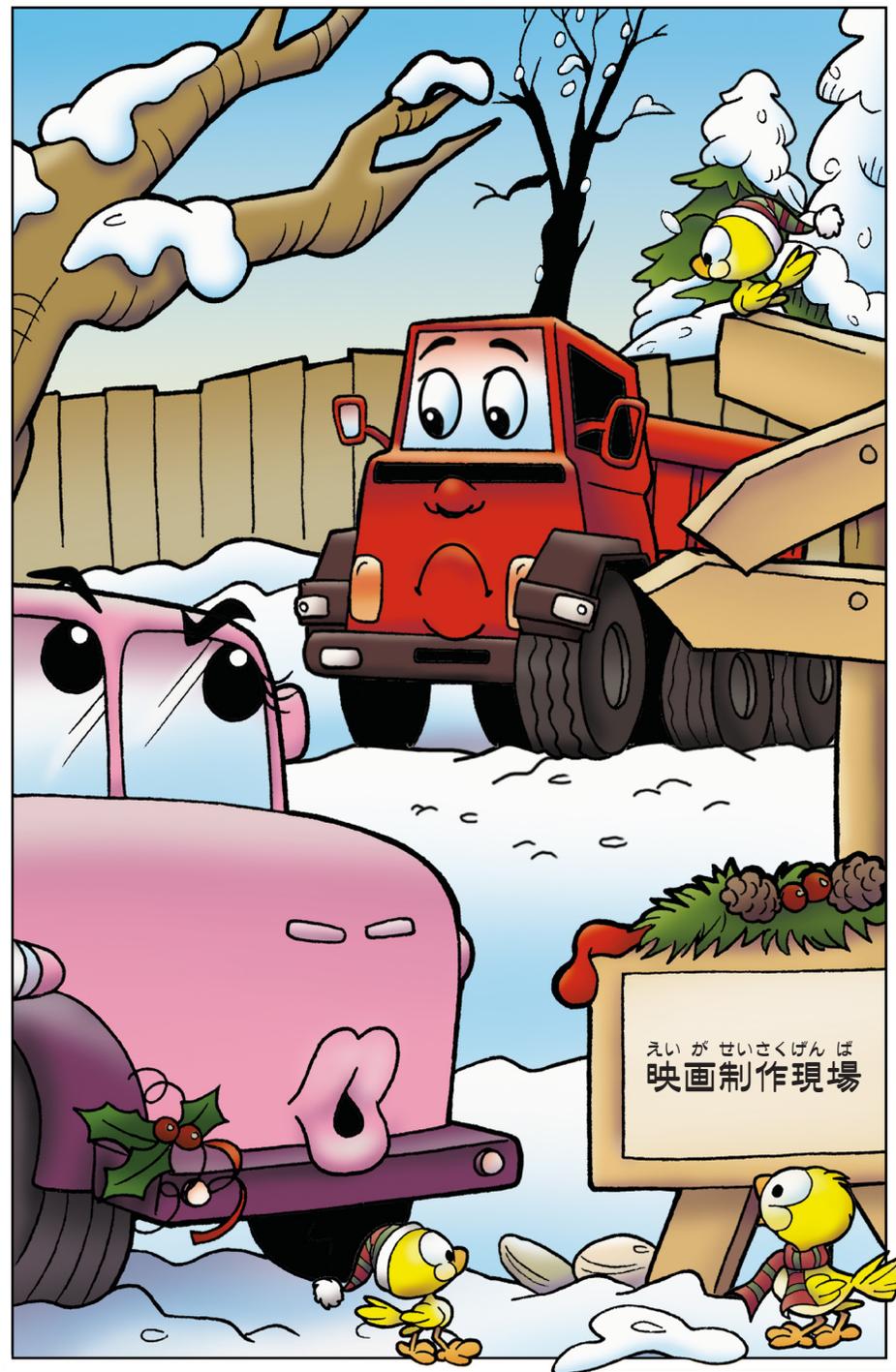
「やあ、ミニショベル君。わたしが頼んだ通りに仕事をしてきている車両がいて、よかったよ。ところで、一体何が起きているのか、知っているかい？」と、監督さん。

「いいえ。自分の仕事でいそがしくて。」

すると、大きな物が落ちる音がしました。監督さんとミニショベルは、何が起こったのかと、ふり向きしました。

「お前のせいだぞ！」 クランクがさげびました。

クランクが持ち上げていた大きな鉄鋼の柱の1本がすりぬけて、地面にドーンと落ちたのです。幸いなことに、落ちたのがあまり高くない位置からで、だれにも当たりませんでした。





「自分のミスなのに、わたしのせいにしてないよ。」
ローリーも言い返しました。「もうちょっとで、わたしに
当たる所だったのよ。そうなら、塗装したてが
台無しになっていたわ！」

監督さんは、もう うんざりです。

「みんな、静かに！」 彼は 拡声器 を使って 言いました。

工事現場は、シーンとなりました。

「今日 ここで 起こっていることは、非常に 悲しい ことです。
現場を 歩き回って みました。聞こえるのは みな、言い争いや
けんかや じまん話や、みにくい 話し方ばかりです。そんな
ことで、仕事ができるでしょうか？」

みんな、だまっています。

「話してもいいですか？」と、ミニショベルが たずねました。

「もちろんだとも。」と、監督さん。「みんなが つまらない
口げんかばかりをしている間、すべき 仕事 をしていたのは、
ミニショベルだけだぞ。」

ミニショベルが 話し始めました。「やあ、みんな。今朝、
ぼくは 考えていたんだ。この 仕事 が どんなに すばらしいかって
ことを。だって、今まで、映画の セット を 作る 仕事 が
できるなんて、考えてみた ことも なかったからね。だけど、
もっと 特別なのは、これが、クリスマス映画のためだって
ことなんだ。それって、すごい ことだ と思う。」



イエス様^{さま}って、すごく 質素^{しつそ}な すがたで この世^よに 来^こられた
でしょ。全宇宙^{ぜんうちゅう}の 王様^{おうさま}だったのに、動物^{どうぶつ}くさい、ちっぽけで
質素^{しつそ}な 馬小屋^{うまごや}で 生ま^うれたんだもの。

イエス様^{さま}は すごく 高貴^{こうき}で 特別^{とくべつ}な 方^{かた}だったのに、自分^{じぶん}が
だれかとか、自分^{じぶん}が どんな こと^{こと}が できるかとか、じまんした
ことなんて、なかったよね。だれにも できないような こと^{こと}を、
たくさんしたの^のにね。だから、もし ぼくたちが それに
ならおうとするなら、つまり、けんきよ^{にゅうわ}で 柔和^{にゅうわ}で しよう^{しよう}と
するなら、もっと たくさん^{おち}のこと^{こと}が できると 思う^{おも}んだ。」

「ま^{まった}たく、その通り^{とお}だ。」と、監督^{かんとく}さん。「ミニショベルの
い^い言^{たま}ってる こと^{こと}は 正^{ただ}しいよ。君^{きみ}たちは みんな、それぞれの
も^もくてき^{くてき}が あって、特定^{とくてい}の 能力^{のうりよく}を も^もって 作^{つく}られている。だが、
い^いっしょに 協^{きょうりよく}力^{りよく}して 働^{はたら}かなければ なら^{なら}ない。それぞれが
ひ^ひつよう^{つよう}と されて^{されて}いる。だからこそ、君^{きみ}たちは この チームに
い^いるんだ。まずは みんな、おたがい^{どうし}同^{どう}士^し あやまって、
それ^{それ}から、すべ^{しごと}き 仕^し事^{ごと}を いっしょに 協^{きょうりよく}力^{りよく}して やらうじや
ないか。」

みんなが おたがい^{どうし}同^{どう}士^し あやま^あった 後^{あと}、建設^{けんせつ}車^{しゃ}両^{りょう}たちは
仕^し事^{ごと}に もど^もりました。そして、団^{だん}結^{けつ}して 働^{はたら}いた 結^{けつ}果^か、
すば^あらしい セッ^あトが でき^あ上がったのでした。

ドウザーが ミニショベルに 言^いいました。「クリスマス^{クリスマス}の
い^いみ お^おち^ちだ 意^い味^みを 思^{おも}い出^ださせて くれ^{くれ}て、あ^ありが^あたう。イエス様^{さま}み^みたいに、
ぼく^{ぼく}たち^{たち}も、愛^{あい}し^あい、助^{たす}け^あ合^あわなくちゃ い^いけ^いないね。」





2週間後に、学校でのクリスマス・パフォーマンスがありました。

トリストンは、デリックとトロイといっしょに、「ドラマーボーイ」を歌いました。3人とも、とても上手に歌いました。それから他の歌が何曲か続き、短い劇が演じられました。みんな、そのショーを楽しみました。

「上出来だ、トリストン！ すばらしいパフォーマンスだったよ。」と、ジェイクおじいちゃん。

「ありがとう。おじいちゃんが話してくれたお話を、他の子たちにも話したんだ。ぼくたち、チームでいっしょにがんばったんだよ。それぞれの役を一生けん命ね。そしたら、うまくいったんだ。」

「本当に、その通りだね！ すばらしいクリスマス・パフォーマンスだった。お前をほこりに思うよ。」おじいちゃんが大喜びで言いました。

「おじいちゃん、メリークリスマス。」そう言って、トリストンはおじいちゃんにハグしました。

「メリークリスマス、トリストン。」

きょうくん
教訓：クリスマスは、愛と思いやりと助け合いの時。
 クリスマスを祝う時は、自分よりも周りの人たちのことを先に考えよう。それが、最高に幸せになる方法。

